

# 特別支援教育だより

三重県立特別支援学校伊賀つばさ学園 教育支援部 発行  
令和4年度 第2号（9月26日）

先日、子ども向けテレビアニメの「きかんしゃトーマス」シリーズに、初めて「自閉症」のキャラクター「ブルーノ」が登場するというニュースを見ました。「ブルーノ」を演じる声優については、自閉症（自閉スペクトラム症、ASD）のある子どもが担当しています。また、キャラクターの開発にあたっては当事者の意見が取り入れられたとのこと。さらに、今年の春にはアメリカの番組「セサミストリート」にも自閉症の特性のあるキャラクターが登場していたことを知りました。世界自閉症啓発デーなどのように、理解周知を目的とした取り組みの一つとして大変意義があると感じました。こうしたテレビ視聴を通して、早期から理解が深まることが期待されます。

今では、自閉症を始めとした発達障がいについての情報は巷に溢れ、多くの人々の関心事項の一つになるまでに至りました。理解啓発を目的としたものや支援の方法についてのものなど様々な書籍が出版され、店頭に並んでいます。特に学校現場においては特別支援教育の完全実施にともない、通常の学級等に在籍する発達障がいのある児童生徒に対して、指導支援が行われているところです。そうした自閉症のある子どもへの支援を目的として、様々な技法や療法が開発されています。一例をあげると、応用行動分析（ABA）、感覚統合療法、太田ステージなどがあります。最近では、ソーシャル・スキルズ・トレーニング（SST）や認知行動療法（CBT）についての実践報告が多い印象です。そうした中において、最も有名なものの一つに「TEACCH プログラム」があります。本稿では、この「TEACCH」について理解を深めたいと思います。

TEACCH（Treatment and Education of Autistic and related Communication-handicapped Children）は「自閉症と関連するコミュニケーション障がい児の治療と教育」と訳され、アメリカのショプラーらによって、自閉症を中心とする発達障がい児のために開発されたプログラムです。それまでは、心の病の一つとして考えられていた自閉症でしたが、言語の理解や情報の統合における困難、感覚の特異性などから、脳の障がいである可能性が示唆されました。そのため、治療ではなく自閉症の子どもたちの生活スキルの向上を目的とした支援方法が検討されたことが始まりです。また、適切な支援を実現するためのアセスメント（環境調整を目的としたもの、CARS（自閉症評定尺度）など）が開発されていますし、保護者をはじめとした支援者の援助スキルの向上について重視されていること（ペアレントトレーニングなど）も特徴の一つです。

自閉症の子どもは、乳幼児の段階からコミュニケーション場面における特徴（名前を呼んでも振り返らなかつたり他者との関わりを好まなかつたり）や限定的な興味（物の配置や数字等に対する極端なこだわり）などが見られます。そのような早期の段階から支援を開始し、将来にわたって地

域社会で暮らすことを目指した包括的なプログラムとなっていることも TEACCH の特徴であり、「ゆりかごから墓場まで」と言われる所以です。TEACCH が生まれたアメリカのノースカロライナ州では、学童期だけでなく成人期における就労や居住などについても、生涯にわたる支援のシステムが構築されています。

広く知られているように自閉症の特徴として視覚的な刺激に対する強さがあります。そこで、TEACCH プログラムでは、「構造化」の手法を用いて、視覚的な刺激を活用します。例えば、特徴の一つである状況判断の苦手さに対して、「いつ、どこで、何をすべきか」についての理解を容易にするために「構造化」により環境を整理します。「学習する部屋」「休憩する場所」というように活動と場所のマッチングをはかります（物理的構造化）。その際、衝立などの工夫を加えることでより効果が期待できます。

見通しを持つことの苦手さに対しては、スケジュールや毎日、毎時間における活動の予告や提示が有効です。具体的には、①活動の内容（音読の場合、題名など）、②課題の量や時間（〇ページの〇行目まで）、③終わりの明示（何をすれば終わりなのか）、④終わった後（ごほうびの活動等）などについて明確にしていくことが求められます。

コミュニケーションの場面では、指示や意思表示にイラストや写真等を提示するなどの視覚的な手法が有効とされています（視覚的構造化）。したい活動や行きたい場所、食べたいものなどをカードという手段を用いて伝えたり表現したりすることでコミュニケーションの力を育みます。

しかしながら、全ての自閉症のある子どもが視覚的な強みを有しているわけではありません。近年の知見では、視覚認知を得意とするよりも聴覚認知を得意とする方が多くいる可能性が示されました。技法ありきで支援を実施するのではなく、その子どもの実態を正しく理解し、適切な支援方法を選択することが必要であると考えます。また、こうしたカード等を使用して指示するという手法が、子どもを支援者の「思い通りに動かそうとする」手段になっていく可能性が懸念されます。その場合、カードに対して強い拒否反応を示すことが考えられます。そうならないためにも、支援者は TEACCH の理念や技法についての正しい理解が求められます。

参考：佐々木正美「自閉症児のための TEACCH ハンドブック」 他  
(文責 清都)

今後の予定	公開体験授業	小学部 10/11 (火)
		中学部 10/20 (木)

9月の小学部公開体験授業については、時間を放課後に変更して個別に体験する方法で実施しました。10月の体験につきましては、現時点では通常のカンパニ方法で検討していますが、状況により、開催方法変更の可能性がありますので、ホームページ等で確認をお願いします。

また、今年度のつばさ祭りにつきましても、昨年引き続き外部の方はご参加いただけません。あらかじめご了承ください。